

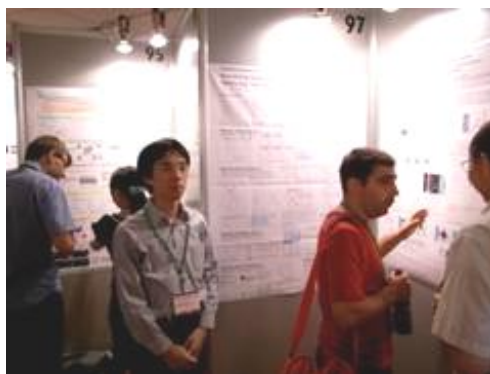
24th International Conference on Photochemistry 会議報告

大阪大学大学院基礎工学研究科・宮坂 博

E-mail: miyasaka@chem.es.osaka-u.ac.jp

2009年7月19日から24日にかけて、Castilla-La Mancha大学のA. Douhal教授を実行委員長として第24回国際光化学会議(International Conference on Photochemistry, ICP2009)が、スペインのToledoにおいて開催された。ICPは2年に一度開催される光化学の大きな国際会議であり、同じく2年に一度開催される同規模のIUPAC Photochemistryとは異なる年に開催されている。どちらかというといふIUPAC Photochemistryが有機光化学を中心としたテーマから発展してきたのに対して、ICPは物理化学関係領域を中心とした学会ではあるが、昨今では両会議の違いは小さくなっている。とはいえKeynote Lectureは、フェムト秒化学のA. H. Zewail教授(米国、1999年ノーベル化学賞受賞)であり、また9件のPlenary Lecturesの発表者(M. Orrit, H. Miyasaka, J. T. Hynes, V. Sundström, M. A. El-Sayed, G. R. Fleming, M. Chergui, A. G. Griesbeck, J. Mänz)の多くも物理化学関係の研究者であった。これらの全体講演を除く発表は3会場で並行して行われ、昨今の研究動向も反映したテーマごとに総計27セッションの発表が行われた。講演総数は上記のKeynoteとPlenary Lecturesを除いて招待講演38件、一般口頭発表102件、ポスター発表326件であり、約500名の参加者があったとのことである。日本からの招待講演者は稲垣伸二(豊田中研)、神取秀樹(名工大)、増原 宏(奈良先端大)の各氏であった。

参加者の内訳は、スペインと日本からの参加者がそれぞれ20%(約100名)ずつのことであり、ドイツからも約19%と多くの参加者があった。日本では5月頃から新型インフルエンザの騒ぎがあり、スペインは感染者の多い国の一つとなっていたことから、当初渡航禁止国に指定していた大学や研究機関も多かったと聞く。そのため日本人のキャンセルが多くて困ると言うことをDouhal実行委員長から前もって聞いていた。私の大学では完全渡航禁止には至らなかったが、当初は渡航の必然性を示す理由書が必要となっていた。幸い一昨年からICPのInternational Organizing Committeeの一員を務めているので、これを理由にするつもりでいた。しかし、ご存知の通り、大阪周辺でも5月中旬ごろから新型インフルエンザが流行したため、結果的には特に問題なく参加でき入江先生、横山先生のグループとの共同研究の結果、またこの特定領域で明らかになった新たな結果も含めて”Multiphoton gated photochromic reaction in diarylethene and fulgide derivatives”と題した内容をPlenary Lectureとして、話すことができた。長い時間(45分)をいただいたので、比較的ゆっくりとわかりやすく話すことができ(勝



上：筆者(右)の講演。左は座長のOrrit教授。下：ポスター発表

手に思っているだけ?)、口の悪い海外の知人・友人からも「今度は大分準備したやろ、うちの大学で話したときよりはずっと良かったで」などと言っていたいくとともに、講演後も、コーヒブレイク等で多くの参加者から質問を受け個別の議論も楽しんだ。一方、新型インフルエンザについては、会議の参加者で自国に戻ってすぐに発症した外国人もいたとのことであり、症状が疑われる人はしかるべき医療機関に行くようにとの会議主催者からの電子メールが、帰国後すぐに届いた。

ホトクロミズムについては Photochromic Materials and Molecular Switches と Photochromic and Photovoltaic Material and Related Processes の 2 つのセッションが行われ、Keitaro Nakatani (フランス)、Andrew C. Benniston (イギリス)、Angel Rubio (スペイン)の各氏の招待講演と 8 件の口頭発表が行われた。筆者も 1 つのセッションの座長を行ったが、それぞれ活発な議論が行われるとともに、ポスターセッションでも多くのホトクロミズムの発表が行われ盛況であった。その他のセッションも、かなり活発なものであったが、これは会場が旧 Toledo 市街から少し離れていて周辺には何もなかったことだけが理由だけではなく、セッション設定がうまく作用していたことにもよると思われる。また、比較的長い休憩時間やポスター発表時間も確保されており、直接的な議論を行う時間も十分に配慮されていた。

Toledo は Madrid から新幹線で 30 分程度の所にある古い街で、その旧市街全体は世界遺産に指定されており、細い街路に古い建物がぎっしりと並び、キリスト教、イスラム教、ユダヤ教などの文化が入り組んだ歴史を有する。旧市街にある大学で行われた 20 日の welcome party、また 22 日の旧市街を歩く excursion も古い町並みを楽しむ機会となった。また 23 日の banquet は、レストランを借り切って屋外で行われた。この時期の Toledo 付近はほとんど雨が降らず、降雨を心配する必要はほとんど無いようである。確かに、飛行機でドイツあたりから下を見ていると、ドイツ上空では大きな森が見え、フランスあたりでは農地があるが、Madrid に近づくにつれて草や木も生えていない茶色い地面が目立つことに驚く。また Toledo は日差しもきつく気温も高いので、日本の夏と同程度に暑いですが、湿度が低いので汗がすぐ乾きべたべたした感じは少ない。この banquet は、まず屋外の庭で 1、2 時間程度、飲み物や軽いつまみとおしゃべりを楽しみ、夜 10 時前くらいから始まるヨーロッパスタイルであり、終了したときは日付も変わる深夜となっていた。主催者の hospitality も一生懸命で食事もワインもおいしかったし、郷にいれば郷に従えであるが、さすがに翌朝は少しきつかった。この banquet も含め全体として良くアレンジされた会議となっており、参加者の多くもサイエンスのみならず、つかの間の Toledo を楽しむことができたと思う。

会議期間中に International Organizing Committee が開催され、次回 ICP は 2011 年の夏に中国科学院 (Chinese Academy of Science) の Tung 博士、Wang 博士を中心に北京で行われることが決定された。



上：Toledo の旧市街風景
下：Castilla-La Mancha 大学で行われた welcome party の様子